

THE NIKKEI MAGAZINE

日経マガジン 教育特集号
7 February 2020

Education

医学部受験特集

進化するAI、変化する医学部教育、
そして難化の一途をたどる医学部入試
さらなる「医師への覚悟」が問われている

巻頭インタビュー

医師を目指す原点を大切にしながら
心臓外科医として挑戦を続けた日々
須磨スクエアクリニック院長
心臓外科医 須磨 久善氏





挑戦を続けた日々 心臓外科医として 医師を目指す 原点を大切にしながら

Special Interview

特集／次代へのメッセージ

須磨スクエアクリニック院長
心臓外科医 須磨 久善氏

中学のときに真剣に将来を考え “幸せ”になるために医師を志望

— 中高時代は、どのような生活を送っていましたか。 —

家族には人も医者がおらず、医者の働く姿に触れることがなかったため、子どもの頃は将来の選択肢の中に医者は入っていませんでした。小学校の先生は親に灘中学校の受験を薦めてくれたのですが、當時の灘中学校は丸刈りで、それが嫌で（笑）、甲南中学に入学しました。普通に勉強していれば大学までストレートに上がる学校だったため、中高時代は本当に伸び伸びとした生活をすることができました。

THE NIKKEI MAGAZINE
Education
医学部受験特集
— 問われる医師への覚悟 —

CONTENTS

03 卷頭インタビュー
須磨スクエアクリニック院長 心臓外科医
須磨 久善氏

06 CLOSEUP 医学部に強い塾・予備校
Y-SAPIX
メビオ×YMS

13 医学部受験 最新入試動向
医学部受験を目指す中高生に必要な力とは

14 イベント情報
医学部受験 予備校合同相談会

日経マガジン エデュケーション 広告特集
企画・制作=日本経済新聞社

デザイン・構成／広真アド
取材・文／cubik、柿崎明子、仲谷宏(拓文社)
撮影／仙洞田猛(帝国写真)

プレゼント
本特集に関するアンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で図書カード2,000円分を10名様にプレゼントします。
★詳しくは14ページへ

Y-SAPIXの特長が最もよく表れた東大館のリベルスクエア。質問や相談ができるスペースが設けられており、インストラクターが常駐している。



国際基準を目指して 大きく変わった医学部 Y-SAPIXで育てる 「次世代の医師」の資質

日本の医学部が大きく変わろうとしている。数年前から進められてきた医学部教育と医学部入試の改革が、国際基準を満たすものとしてアップデートを完了しつつあるのだ。カリキュラムが実践を重視する内容に改められるほか、今年度入試からは、国内のすべての医学部入試で面接が導入される。定員削減によってますます狭き門になる医学部だが、これからの受験生にはどういう力が求められるのだろうか。Y-SAPIX東大館の奥村直生館長に聞いた。

Y-SAPIX東大館 奥村 直生 館長

日本の定員減となることが、文部科学省より発表された。

東北大学は19人減少など、滋賀医科大学全体としての入学者枠が削減されることになり、いよいよ医学部の定員の減少期に入したと言つていいだろう。ただでさえ狭い医学部の間口が、さらに狭くなることは間違いないなさそうだ。

近年は、定員の内訳も大きく変化している。後期試験を廃止する代わりに「総合型選抜（AO入試から名称変更）」と学校推薦型選抜（推薦入試から名称変更）」の枠を拡大する国公立大学が増えているためだ。最近では、総合型もしくは学校推薦型の入学者数が後期試験の入学者数を逆転し、全体の約4分の1を占めるまでになってしまっている。これまでの一般的な受験パターンは前期と後期を利用することで、定員を最大化するが、これからは「総合型・学部推薦型選抜と前期との組み合せがより一般的になるでしょう」と奥村館長は予測する。

総合型・学校推薦型選抜では、高校3年間の評定平均はもちろんのこと、部活動での活動実績、各種コンクールでの入賞歴、海外留学の経験など、学内外でどのような経験を重ねてきたかが問われる。普段から学校の授業や校内行事にしっかりと参加しながらも、趣味や特技にも力を注ぎ、結果を残すことが合格への近道になるだろう。

一見、受験には関係ないようなこ

世間では2020年度から始まる大学入試改革の是非にばかり注目が集まっているが、それよりひとつ先に变革を遂げようとしているのが日本の医学部教育だ。

この大きなきっかけとなつたのは、いわゆる「2023年問題」と呼ばれる、アメリカの公的機関ECFMG（外国医学部卒業生のための教育委員会）による通告だった。その内容は、「23年以降、国際認証を受けた医学部の出身者でなければ、アメリカの医師国家試験の受験を認めない」というもの。「その時点まで、日本医学部はゼロ。このままでは、日本の医師がアメリカで働けなくなる」と危惧した日本の医学教育界は、カリキュラムや入試方法を見直しに取り組みました。そのため、大学で国際標準に沿つたものへと改編されたというわけです」と、Y-SAPIX東大館の奥村直生館長は説明する。

この改革の大きな目玉として挙げられるのは、医学部の5~6年生で行われる臨床実習が欧米並みに充実したこと。それまで通算50週程度だった実習時間が、国際標準の72週前後まで増えたのだ。実習の形も、主に指導医の診療方法を見て学ぶ「見学型」から、チームの一員として患者の治療に主体的に携わる

Y-SAPIX東大館の奥村直生館長は説明する。

この改革の大きな目玉として挙げられるのは、医学部の5~6年生で行われる臨床実習が欧米並